

極東米国陸軍地図局(AMS)の事績と貢献

国土環境株式会社(もと国土地理院) 長岡正利

敗戦から復興へ、地理調査所の胎動と事業

昭和20(1945)年の晩夏、日本は国家未曾有の敗戦という事態の中での虚脱感、物資不足とインフレのただ中にあった。空襲で焼失した三宅坂の陸地測量部庁舎は戻る所ではなく、陸軍の組織を内務省に移管して発足した地理調査所の職員は松本で日々を過ごした。翌年3月から始まった千葉市黒砂町の旧戦車学校への移転作業は7月には終えたものの、職員と家族の住居確保が大変であった由である。占領行政下であり、連合国軍総司令部(米国軍)による指令作業が優先された。21年1月の「日本測地基準点標石調査及び復旧に関する件」に始まって、2月に「全国地名調査と地図資料調査に関する件」、3月「日本土地利用図作製の件」、5月「航空写真上に測量基準点を標示する件」などと、矢継ぎ早の指令であった。主食にさえことなく統制配給の中で、長期出張のための日用品や作業用品の特配に奔走するのが、作業主任者の心労の種であったという。

敗戦時まで、嘗々と進められてきた龐大な外邦測量の成

果と地理資料は、一夜明ければ忘却の彼方となった。国内地図の本格的修正にかかる前に、需要が急増した地図の複製発行にまず着手され、昭和21年に1色コロタイプ版による20万分1図が、22年には5万分1図の再刊が始まった。

米国陸軍工兵隊、AMSの創設とその事業

このような中で、米国陸軍工兵隊の第64地形技術大隊は、昭和21年に東京新宿の伊勢丹百貨店ビルの3階以上を接收(デパートは2階以下で営業)して、東南アジアの全域からシベリアを含む地域の地図作成を始めていた。

大隊は、日本政府との基本労務契約に基づいて日本人技術者を続々と採用かつ訓練するとともに、民間会社と政府機関から熟練した技術者を得た。満洲國にあった関東軍測量隊隊長小川三郎陸軍少将などの、旧日本軍の将官級の人などが、軍事情報顧問や軍事情報分析職として勤務した。

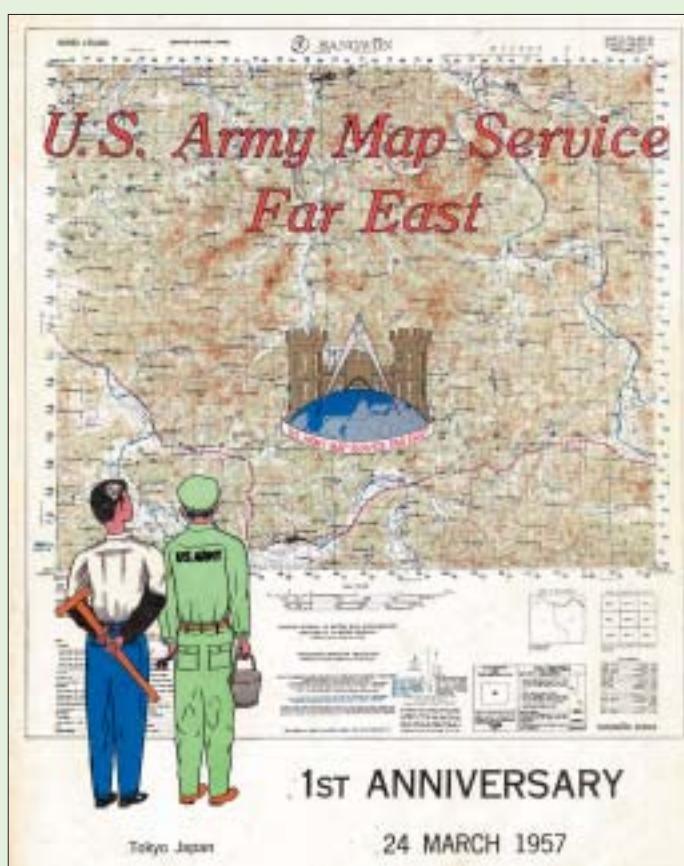
昭和28年春には、大隊は東京十條にあった旧陸軍十條兵器製造所(造兵廠:現、陸上自衛隊十条駐屯地)に移転した(「王子キャンプ」:上がその構内俯瞰写真)。29年7月に大隊は、フィリピンから到着した第29大隊に交替した。その時点で雇用されていた日本人は949人。30年時点で月間平均176面(種類)の地図が作成されていた。

この間、昭和25年には、朝鮮戦争(~28年)が勃発し、日本国内は米国軍の兵站基地となって特需景気にわいた。東南アジアでは、日本降伏の翌年に独立を宣言した北ベトナムが、23年末には宗主国フランスとの間でのインドシナ戦争(~29年)に突入していた。戦争遂行のために精確な地形図が必要であったことは、言を待たない。

この時代、アジアでは各国が相次いで独立し、或いは民族紛争が激化するなどの、激動の時代に入っていた。

昭和31年3月には、第29地形技術大隊から分離する形で、米国陸軍極東地図局(Army Forces Far East Map Service)が編制され、主要作業場に最小限の米国軍人を監督として残して日本人従業員が管理・運営する形に改編された。翌32年1月には、極東米国陸軍地図局(U.S. Army Map Service, Far East: AMS, FE)と改称された。

日本の領域に対しても、全国土の航空写真撮影が21年から始められていた。この写真と前述の指令作業の成果を利用して全国の5万分1地形図が作成され、重要な地域は



AMS創設1周年記念誌の表紙より 背景は朝鮮5万分1図



AMSの第35棟の内部(左)と、写真測図班でのマルチプレックス図化機(中)と戦地に向けての大量の地図発送(右)(同前より)

短期間での修正も行われた(下図)。これは軍用図であったが、後には、昭和34年11月の日米協定によって、日米双方で使用する5万分1特定地形図の作成も始められた。これらの一部は後に、日本の地形図に切換・利用された。

AMSの地図、その後

やがて、冷戦構造の解消とともにAMSはひっそりとハイに引き上げ、王子キャンプは日本に返還された。

短い期間のうちに、日本と東南アジアの広大な一帯について、航空写真測量を中心とする各種地形図が作られた。ところでその後、これらの地図はどうなったのか。

昭和28年3月の「建設省地理調査所と極東軍司令部技術部との間の地図作製及び測量の方針運用に関する取極」で、地図は地理調査所に供与され続けていた。ところが、「特定地形図」を除くこれらの地図は、この連載の第8回で述べた外邦図への措置と同じ頃に処分されたようで、一部に、

国立国会図書館に移された(受入れ記録から推察)ものがある程度である。なお、当編纂された『測量・地図百年史』でも、AMSの事績はほぼ無視されているに等しい。

米国内では、これらの地図は貴重な地理・地誌資料として保管されていることと思われるが、中で、カリフォルニア大学には、米国軍が鹵獲・接收したドイツや日本の作成にかかる外邦図コレクションがあるようで、旧ソ連邦作成の地形図とともに内部利用ができる。外部からは、そのWebサイトで当時の一覧図(AMS Index Maps)の閲覧ができるが、アジアの広域についての厖大な地図群と地理資料の継承を重視する姿勢には、敬意と驚きを禁じ得ない。

参考

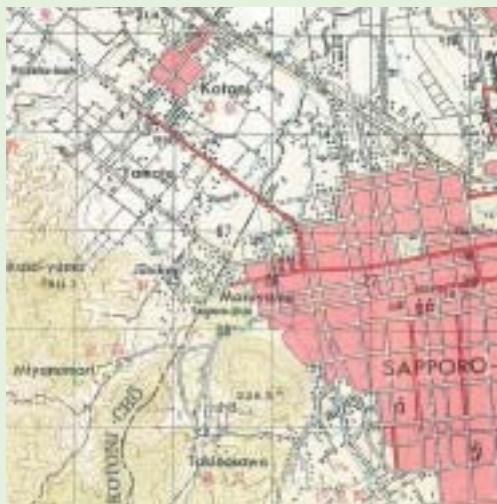
AMS:『U.S.Army Map Service Far East, 1st Anniversary』(1957)

第34回国会日米安全保障条約等特別委員会議事録第24号(1970)

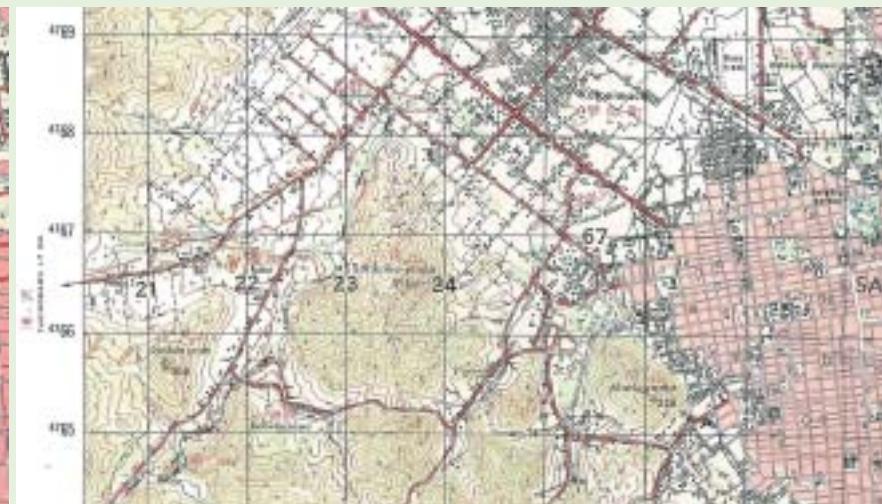
百年史編集委員会編:『測量・地図百年史』、国土地理院(1970)

青野達雄:『米寿を迎えて』(2004;私家版)

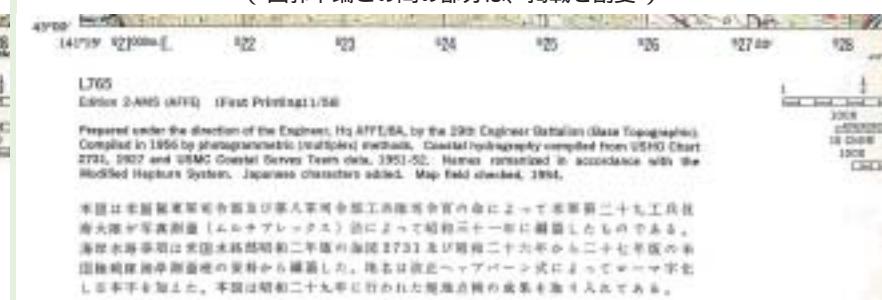
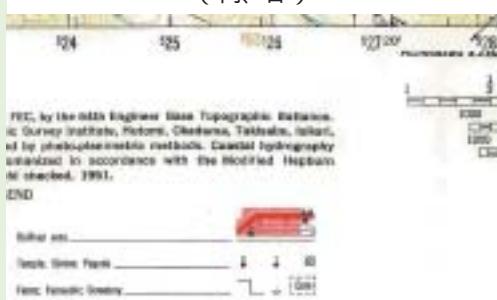
カリフォルニア大学バークレイ校図書館のWebサイト



(同、右)



(図郭下端との間の部分は、掲載を割愛)



AMS 5万分1地形図「札幌」の、1952年初版(左)と1954年修正版(右)後の版では、地名と整飾欄に日本語表記が多くなる。